《国際シンポジウム報告》

「近代から現代へ
—第七回両岸三地歴史学大学院生論文発表会」
参加記

吉見　崇

本稿は2006年9月3日～7日に中国・福建省廈門市の廈門大学にて開かれた「近代から現代へ—第七回両岸三地歴史学大学院生論文発表会」（中国語名称は「従近代到当代—第七届両岸三地歴史学研究生論文発表会」、以下「発表会」と略記する）の参加記である。本稿が読者諸氏に少しでも発表会の様子が伝わる一助になれば幸いである。

発表会は、その名の通り両岸三地、すなわち中国大陸、台湾、香港の歴史学を専攻する大学院生たちが報告する場であり、毎年開かれ、今回は第７回目である。このように発表会の参加者は中国語圏の大学院生であり、従来までは完全な国内会議であった。

しかし、今回より日本（３名）、韓国（１名）の大学院生が参加したことが特徴といえよう。今回の発表会のテーマは「近代から現代へ」であり、２日にわたって54名の報告が行われたが、そのうちの多くが中国近現代史に関する報告であった。ちなみに日本からの報告は、加島潤（東京大学大学院）「上海ゴム工業の市場と産業組織　1946～1956」、柳亮輔（北海道大学大学院）「国共内戦時期（1945～1949）『民主』概念の再検討」、そして筆者の「戦後国民政府の司法政策（1945～1949）－司法行政部、大法官会議を中心に」である。筆者の報告は、戦後中国政治における司法問題への中国国民党（以下、国民党）の取り組みを、「法治」や「司法の独立」を目指したものと一定程度評価する内容だったのだが、これに対して中国大陸の院生から過度の「反論」、そして台湾の院生から過度の「賛美」はなく、冷静に肯定的な評価をしてくれたと思う。両岸ともに脱「革命史観」が急速に進んでいることを肌で感じた。

私の問題関心に即せば、多くの報告のなかで国民党に対する評価が興味深かった。それは、両岸の大学院生ともに抗日戦争期の国民党の果たした役割およびその限界を正当に指摘していたことである。それらの評価の下敷きとして、近年国内外で定着しつつある国民党の「弱い一党独裁」論があるように感じた。孫文の提唱した国民党が歩むべく政治プロセス、いわゆる三序構想「軍政→訓政→憲政」に従えば、「革命政党」としての国民党が主導した軍政期、そして「弱い一党独裁」を国民党が行った訓政期という位置づけは、今回の発表会における各報告においても多少の差異はあれ、共通したものであった。しかし、憲政すなわち民主化を実施に移そうとした戦後の国民党をどのように位置づけたらよいの

だろうか。まだ、明確な答えは出ていないように思う。抗日戦争の勝利、「復員」、そして国共内戦という特殊な状況で民主化を行おうとした国民党を、「何故、国民党は大陸を失ったのか」という観点に留意しつつも、民主化の試みのなかで果たした役割とその限界を客観的に評価し、戦後中国政治史のなかに位置づけなくてはならない。今後、筆者も民主化のひとつのメルクマールである「司法の独立」といった視点から、この問題を考察していきたい。

2日間の報告を聞いてみて（勿論、全ての報告を聞けたわけではないが)、全体として感じたことは第一に、女性史、医療衛生史といった社会史的な報告が多かった一方で、政治史、外交史、経済史に関する報告がとても少なかったということである。この傾向は現在の日本の中国近現代史研究においても見られるものであり、ひとつの共通した傾向だと感じた。しかし、女性史や医療衛生史といった研究が意義あるものだということに無論筆者も同意するが、だからといってそれが政治史、外交史、経済史を疎かにする理由にはならない。今後、この共通する研究動向にいかに向き合っていくべきなのか、とても考えさせられた。

第二に、発表会のテーマが「近代から現代へ」となっていながらも、清末から民国期への、もしくは「1949年革命」前後の変化はいかなるものであったのか、換言すればそれぞれの転換期の前後に存在する特殊性と普遍性とは何であったのかという視点をもった報告が少なかったことである。両岸ともに脱「革命史観」が進んでいるとはいえ、特に中国大陸では「1949年革命」の前後について論じることに現在でも政治的に制約があることは、筆者も承知している。しかし、各々の研究内容が細分化している昨今、「1949年革命」の前後といった古くて新しい大きな課題を、筆者自身も含め20世紀中国史のなかでいかに位置づけていくかを改めて考えなくてはならないだろう。

発表会の最大の意義は中国大陸、台湾、香港、そして日本、韓国の多くの大学院生が寝食を共にし、交流できたことである。各々の論文が事前に配布されなかったなどの問題はあったものの、その意義がそれによって色褪せることは決してない。次回からそれらの問題も解決し、さらにアジアの大学院生同士で交流が盛んになることを期待しながら、擱筆する。

[付記] 発表会に参加するにあたり、当日も参加された貴志俊彦先生より多大な御援助を賜りました。この場をお借りして、御礼申し上げます。

(YOSHIMI Takashi)